

グラント解剖学図譜 第4版

Anne M. R. Agur 著

山下 廣, 他 訳

＜書評者＞ 坂井建雄（順天堂大学教授・解剖学第一講座）

『グラント解剖学図譜』は、世界で最も愛されている解剖学図譜である。その待ちに待った新訳がついに刊行された。この前の第3版が出てから、20年ぶりのお披露目である。原書は、1991年に出版された“Grant’s Atlas of Anatomy, Ninth Edition”である。

「グラント」の解剖図には、独特のわかりやすさと、不思議な魅力がある。例えば、下肢と上肢のところでは、骨、血管、神経の全体図がコンパクトにまとめられている。胸腹部内臓の前面と後面からの全体像も、まさにこんな図が欲しいと思いながら、他ではちょっとお目にかからないようなものである。講義の準備をするときに、つつい「グラント」の解剖図を多用してしまう。

何といても、「グラント」の魅力の中心は、彩色ハーフトーンによる解剖図である。彩りがほんのりしていて、人体解剖の実在感を残しながら、柔らかに優しい印象を与える。しかも構図の取り方が、実にすばらしい。1つひとつの解剖図が、何を中心に描きたいか、そのテーマが絞込まれて明確である。皮膚を一部残したり、

周辺の構造まで少し余分に描くことで、何をどこから見た図なのか、一目瞭然に分かる。構図を広くとりすぎると、何から何まで描き込まれてしまって、テーマが散漫になってしまう。狭く絞りすぎると、いったい何を描いているのか、全体の中での位置づけが見えなくなる。その辺りのバランスが秀逸である。

解剖図の良し悪しがわかるには、若干の経験とセンスが必要なのかもしれない。「グラント」の解剖図が優れているのは、人体解剖の場面を実際に観察して、正確に描いているということである。『ヴォルフ・ハイデッガー人体解剖カラーアトラス』なども同様に、人体解剖の観察をもとに描かれている。観察して描いた解剖図か、知識をもとに描いた解剖図かは、目のある解剖学者であれば、容易に区別がつく。神経や血管の走り方の微妙なばらつきが損なわれて、走行や分岐が規則的に描かれていたり、太さのバランスが異様であったり、そんないい加減な解剖図で、一見ハーフトーンで美しく描かれているものが、意外とよく売れていたりする。概念図であ

りながら、解剖図であるかのように装うこんなまがい物は、学習者にとって大きな誤解のもとである。知識に基づく概念図はそれらしく線画で、解剖図は美しくハーフトーンで描くべきだ、と私は思う。そんな内容と形式が一致した、良質な解剖図譜を用いて、多くの人に学習してもらいたいものである。

「グラント」の解剖図は、この『グラント解剖学図譜』だけでなく、他の教科書や実習書にも用いられている。昔から有名なのは、“Grant’s Dissector”という解剖実習書である。最近では、Moore and Agur の“Essential Clinical Anatomy”という臨床解剖学の教科書にも転用されている。こちらは、私の訳により『ムーア臨床解剖学』として出版されているので、日本の読者にもなじみが深いと思う。

この『グラント解剖学図譜』は、原書ではすでに第10版が出版され、近々第11版も出版の見込みだと聞いている。日本語訳の出版も、なるべく早く、原書の改訂ペースに近づいてもらいたいものだと、強く願う。それだけ多くの人が待ち望む、解剖図譜である。

●A4変型 頁684 2004年
定価12,600円（本体12,000円＋税5%）

[ISBN4-260-10076-9]

医学書院刊